

こみやま ひろし
小宮山 宏 総長経歴

(昭和19年12月15日生)

経 歴

- | | | | |
|-------|-----|-----------|--------------------------------|
| 昭和42年 | 3月 | 東京大学工学部卒業 | |
| 〃 | 44年 | 3月 | 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了 |
| 〃 | 47年 | 3月 | 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了 |
| 〃 | 52年 | 5月 | 東京大学工学部講師 |
| 〃 | 56年 | 1月 | 東京大学工学部助教授 |
| 〃 | 63年 | 7月 | 東京大学工学部教授 |
| 平成 | 6年 | 4月 | 東京大学総長補佐 (～平成7年3月) |
| 〃 | 7年 | 4月 | 東京大学大学院工学系研究科教授 |
| 〃 | 11年 | 4月 | 東京大学評議員 (～平成12年3月) |
| 〃 | 12年 | 4月 | 東京大学大学院工学系研究科長、工学部長 (～平成14年3月) |
| 〃 | 15年 | 4月 | 東京大学副学長、附属図書館長 |
| 〃 | 16年 | 4月 | 国立大学法人東京大学理事 (副学長)、附属図書館長 |
| 〃 | 17年 | 4月 | 東京大学総長 |

現在に至る

役員等役割分担

職名	氏名	前職	担当
総長	小宮山 宏	理事(副学長)(元工学系研究科長)	
理事(副学長)	桐野 豊	薬学系研究科教授(前薬学系研究科長)	研究、国際交流、環境安全等
理事(副学長)	西尾 茂文	生産技術研究所長	財務、施設、キャンパス・交通、柏、病院等
理事(副学長)	古田 元夫	副学長(元総合文化研究科長)	教育、学生、入試、留学生等
理事(副学長)	濱田 純一	大学院情報学環教授(元大学院情報学環長)	総務、広報、評価、人事、情報公開・個人情報保護等
理事(副学長)	石川 正俊	副学長(情報理工学系研究科教授)	情報、産学連携
理事	池上 久雄	社団法人日本貿易会常務理事	卒業生との連携、学友会、ホームカミングデイ、基金、運動会
理事	上杉 道世	東京大学事務局長	事務組織、労務、法務、倫理
監事	石黒 光	特定非営利活動法人言論NPO理事(非常勤)	
監事	佐藤 良二	公認会計士(監査法人トーマツ東京地区業務執行社員)	
副理事	石堂 正信	(株)JR東日本企画取締役経理局長	調達、財務分析
副理事	竹原 敬二	(株)リクルート常務執行役員	基金、広報等
副理事	片山 直久	興和不動産(株)常務取締役	施設、基金

学術を背景に時代の先頭に立つ大学 —世界を相手に競争を—

「自律分散協調系」の運営

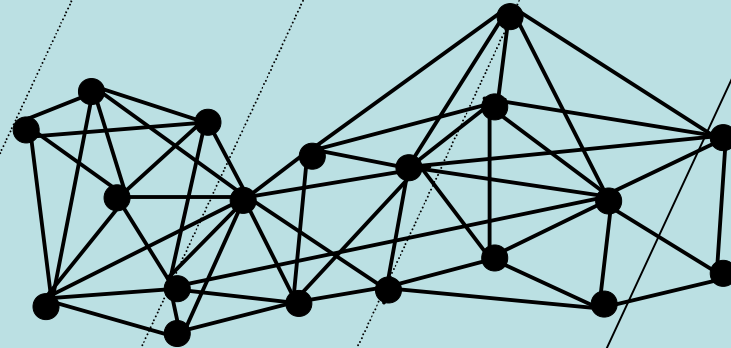
教育

学術俯瞰講義...

研究

学術統合化プロジェクト...

「知の構造化」



財務

人事

施設

....

研究科、学部

研究所

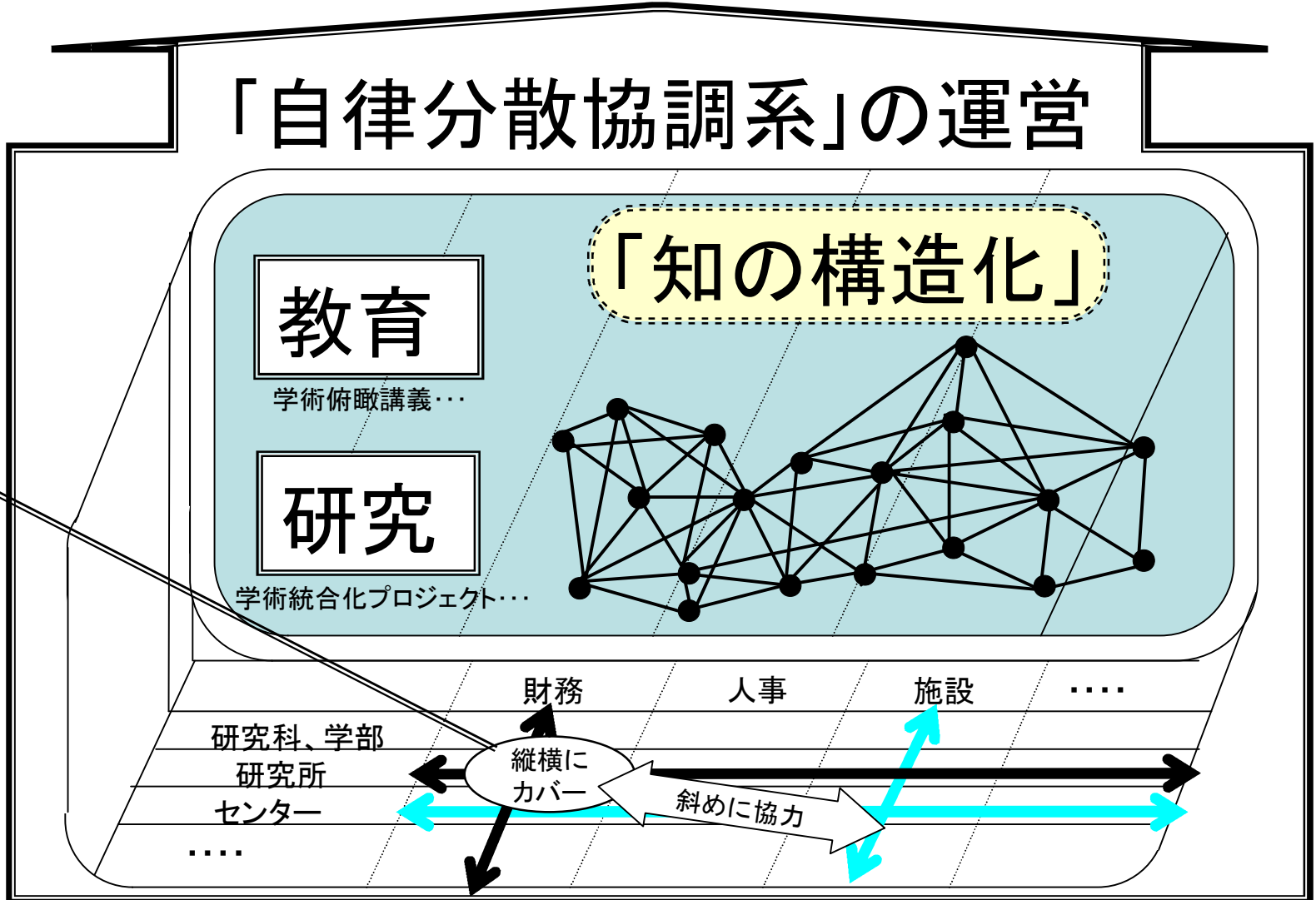
センター

....

縦横に
カバー

斜めに協力

「飛車角方式」による支援



世界一の総合大学を目指して

熾烈な競争環境

大学は現在、世界的な競争環境におかれています。人材育成の場として、未来を牽引する創造の場として、社会との間で知が交叉する場として、どの大学が21世紀をリードするのか競争は熾烈を極めます。優秀な若者に、トップクラスの研究者に、問題意識を抱くすべての人々に、いかに魅力ある環境を提供できるのか、それが大学の競争力の本質です。東京大学は世界有数の総合大学として、すでに内外から高い評価を得ておりますが、さらに高きを目指して、なすべきことは山積しています。

このような時期に総長の指名をいただいたことは何よりの光栄であると、微力を尽くす覚悟しております。21世紀におけるリーディングユニバーシティのビジョンに向けて、破壊と創造といった方法ではなく、これまでの蓄積を尊重しつつ、自然にかつ速やかに、変化を誘導しうる大学モデルを実現いたす所存です。

ビジョンとしての自律分散協調系

大学は、その成員が自らの確信に基づいて行動する場です。しかし一方において、組織としての効率を社会から鋭く問いかけております。それに対して、世界の大学人が明快に答えているとは残念ながら申せません。

自律分散協調系という、生命体を表現する概念があります。心臓や肝臓といった臓器は体内に分散して存在しそれぞれ自律的に動いていますが、総体としては協調的に機能し、生命の営みがなされています。この概念は、まさに大学のあるべき姿を象徴するものであり、その実現に成功した大学は、世界のリーディングユニバーシティとしての評価を獲得することになるでしょう。

「自律分散協調」をキーワードとして、機動力のある中枢、緩やかな分権、柔軟なインターフェイスという三つの仕組みを適切に動かすことで、活力ある大学のモデルを開発してゆきたいと思えます。

背景としての知の構造化

20世紀における学術の進歩は、学術領域の極端な細分化をもたらしました。専門を異にする人々の相互理解は著しく困難になっています。社会から大学が見えにくくなっているばかりではなく、大学の内部でもお互いにお互いが見えないという状況が生じています。現在の大学は、大学人が本質的に有する自律性が強調され、もう一方の協調性が薄らいでいるかのように私の目には映ります。こうした状況の基本的原因は、相互理解が困難になったことにあるのです。

外部との関係で言えば、大学に対する社会の要請の多様性に留意する必要があります。

宇宙の果ては何かといったナイーブな好奇心への答え、環境といった複雑な問題への包括的な解、あるいはまた、生産活動のひとつの局面のみに必要な高度な専門的知識など、多様な知を多様な社会が求めています。細分化した領域における熾烈な競争にしのぎを削る大学人の一人一人が、こうした期待に直接応えることは困難を極めます。

知の構造化は、こうした困難を克服するための基盤となり得ましょう。それは、細分化した知識を相互に関連づける営為であり、研究者が自らを全体像のなかに位置づけることを可能にし、テーラーメイドな教育や、先端と基礎との距離を短縮する教育を実現し、社会の要請と人類の知との交叉によって新しい概念を産み出すことを可能にするための知的挑戦です。

卓越した研究をいっそう推進しつつ、「知の構造化」を進めることによって、学術の成果と社会の問題が交叉する場となり、新しい学術領域、社会のモデル、産業を産み出してゆきたいと考えています。

協調の仕掛け

大学は自律性の高い部局からなる連合体です。自律性が学術にとって不可欠であることを、人類は歴史の教訓から学びました。東京大学の部局数は40にも達し、それらは5千人の構成員を擁する研究科から数人のセンターまで、規模も、ガバナンスの構造も多様です。この自律分散系に直接導入できるような協調の仕掛けのモデルは、他の組織には見あたりません。私達は、東京大学にふさわしい仕組みを、私たち自身で産み出してゆく決意を固めております。

自律分散系に触媒として持ち込むべき「協調の仕掛け」は、すでにくつかの基本コンセプトが提案され、その具体化を検討しています。たとえば教育においては、世界トップレベルの教員による「学術俯瞰講義」の導入が、教養教育のさらなる発展を視野に入れつつ企画中です。研究においては、「学術統合化プロジェクト」が、極端な細分化を進めつつある現状の学術に対して、統合化の新しい流れを作り、知の全体像構築に寄与すべく、4月1日にスタートしております。また、支援組織の抜本的強化に向けて「飛車角方式」を検討中です。本部職員が部局パートナーとして、部局毎すべての教職員にワンストップサービスを提供します。縦割りの部局と縦割りの支援組織とを、縦横無尽に機能する部局パートナーが融合させるという画期的な試みです。

たえず新しい意識にめざめつつ、ゆったりと、しかし着実に、新たな知の創造という課題に向けて進んでゆきたいとおもいます。ご理解とご支援のほどをお願い申し上げます。

2005年4月

東京大学総長 小宮山 宏

■新しい知の創造への挑戦■

東京大学は「世界の東京大学」という目標を掲げ、人類社会の公共性に貢献する大学づくりを進めています。21世紀に入って世界の変化の速度はいよいよ激しく、技術と社会、人類と環境、あるいは文化間の葛藤は一層顕在化の様相を深めています。その一方で、国家の時代は終焉の方向に向かい、世界的な競争が始まるとともに、人類社会という自覚も芽生えています。このような激動の時代に、東京大学は、〈知〉の復権を人類社会への貢献の柱として据えたいと考えます。

〈知〉とは本来、人間を自由にするものです。人と人との自由な交流を促し、活力を与え、様々な制約から人間を解放する根元的な力です。知の創造と活用が、これからの人類社会の様相を決めていくと言って過言ではありません。

人類社会は、その長い歴史において、膨大な知を産み出しつつ発展してきました。しかし、この100年以上にわたる急速な細分化・専門化の流れに伴って、知のあるべき本来の姿が見失われつつあります。知の復権を唱える以上、いまこそ、知の集積の場である大学が、社会に対して自らを開き、新しい交流と発展の核となることを目指さねばなりません。

私たち東京大学は、知への信頼を再構築する新しい大学のモデルを世界に対して提案していく役割を担いたいと考えます。

大学という組織自体を、活気に満ち、自由で知的なエネルギーに満ちたものに変えていく努力が必要です。「自律分散協調」をキーワードとして、機動力のある中枢、緩やかな分権、柔軟なインターフェイスという三つの仕組みを適切に動かすことで、活力ある大学のモデルを開発していきます。

あらゆる組織のレベルで、前向きな検証・改革が不断に行われる必要があります。常に切磋琢磨する組織に身をおくことを通して、私たちはたえず問題意識を高め、自分たちの使命に的確に応えることが出来るようになります。国内外の優れた事例に学びつつ、新しい大学の成員としてのライフスタイルを東京大学の個人個人が追求して欲しいと思います。

そのような環境を活かして、すべての東京大学の成員が、世界を牽引する創造の事業にともに関わることを求めます。これによって、「世界一の教育と研究」を実現しましょう。本質を捉える知、他者を感じる力、先頭に立つ勇気を備えた次世代の人材を送り出すことが目標となります。さらに、東京大学は、卓越した研究をいっそう推進し、先端的なく知の総合化を進めることで、学術の成果と社会の問題が交叉する場となり、新しい学術領域、社会のモデル、産業を産み出していきます。

たえず新しい意識にめざめつつ、ゆったりと、しかし着実に、新たな知の創造という課題に向けて進んでいくことを、東京大学総長着任を期に、すべての人たちに訴えます。

2005年4月1日

東京大学総長
小宮山 宏